

情報活用能力を高めるための基盤としての大学における情報リテラシー教育(その3) : オリエンテーション科目としての「論文執筆法」

著者名(日)	戸田 光昭
雑誌名	文化情報学 : 駿河台大学文化情報学部紀要
巻	6
号	1
ページ	49-58
発行年	1999-06
URL	http://doi.org/10.15004/00000673

情報活用能力を高めるための基盤としての、 大学における情報リテラシー教育（その3）

オリエンテーション科目としての「論文執筆法」

戸田光昭

【要旨】大学における情報リテラシー教育のうちで、最も基礎的な科目の一つとして位置づけられる「論文執筆法」について、その意義ならびに、いくつかの大学における事例との比較なども含め、駿河台大学文化情報学部における実践事例を紹介する。

【キーワード】情報リテラシー、大学教育、情報活用教育、図書館利用教育、情報探索法、論文執筆法、情報表現法、言語表現法、論文作法、作文技法

1. はじめに

前稿¹⁾では、大学におけるオリエンテーション科目の一つである情報探索法入門として、駿河台大学文化情報学部における「資料検索法」を紹介した。今回は、オリエンテーション科目としての「論文執筆法」を取り上げて、情報表現法、言語表現法、プレゼンテーション法、情報創作法など様々な名称でよばれている文章作成技法の学習・教育・指導方法について考察し、あわせて実践事例の報告を行う。

2. 文章・レポート・論文作成技法の意義

2.1 文章を書くことの意義

書くことは考えることであるとも言われるように、深く考えるためには文章にまとめることが重要である。特に書くという行為は、そのまま考えることにつながるのである。現在は、各種の道具が豊富に用意されているので、例えば、話を録音してまとめる、写真で表現する、コンピュータソフトを使って表現する、イラストでまとめる、映画を作るなど多様な表現形式を採用することが可能であるが、深く考えるためには、やはり、文章にまとめることが不可欠である。電話で何事も済

むようになり、ほとんど手紙を書かなくなったと言われるようになって久しいが、最近では電子メールがビジネスの世界だけではなく、個人生活の中にも定着しており、伝統的な通信手段としての手紙が、新しい形式で復活してきたのは興味深いことである。

2.2 文章作成技法の重要性

情報が氾濫している現代にあっては、いかにアピールし、いかに正確に、しかも分かりやすく、簡潔に伝えるか、という文章作成技法がますます重要になっている。テレビコマーシャルなどは、かなり極端な映像化手法を使って視聴者や消費者に訴えようとしているようであるが、それも日常化してしまえば効果が薄れる。しかし優れた文章は、日常化しても飽きることがない。正確で平易な、しかも読む人の心に訴える文章は、今後ますます重要になってくるであろう。

作家の猪瀬直樹氏は、「活字で心を洗う」という題の文章で、現在、全国の小・中・高校の3%程度で行われている10分間読書運動のことを、次のように紹介している。

「メディアの情報のかなり多くの部分は、選ぶノウハウがないかぎり、ただのノイズなのだ。だから情報の海で溺れかけた生徒たちを救出するた

めには、いったんすべての情報を遮断して、透明度の高い言葉=活字によって心を洗ってやるしかない。情報の質の復権である。』²⁾

このエッセイは、読書の重要性、それも集団読書の意義を述べているが、文章作成技法でも同じようなことがいえる。しかも、文章作成は読書と密接な関係を有する。すなわち、読書の量と読書の質が、文章作成能力と文章の質を左右するのである。そこで、上記の文章は本稿に大いに関係する内容となる。さらに、情報の海で溺れないためには、前回に紹介した「資料検索法」の技法や考え方が大いに役立つのである。

2.3 論文の文章スタイル

論文は文章の中で最も完成されたスタイルの一つであり、客観的な情報表現形式の典型でもある。文章にはさまざまな形式が存在し、絵画に近いもの、音楽に近いもの、写真に近いもの、映画に近いものなどを考えることができるが、論文はそれらの中で、最も抽象度の高いものである。その意味では、数字を表現形式として用いている数学に近いのが、理想的な論文であるといえるかも知れない。

論文のスタイルには規定や約束事があり、それらにならって、規定通りに書く必要がある。勝手気ままに書いた文章は、論文としては認められないのである。このように規定化し、定形化し、標準化することにより、客観的で、抽象的な内容を表現することが可能となる。

2.4 情報探索入門と言語表現法

言語表現法、文章表現法などの名称の科目が全国の大学で多く開講されるようになった。そのいくつかは、駿河台大学との比較対象として、この後で紹介する。しかし、駿河台大学のように、オリエンテーション科目群という位置付けのなかで、他の科目との関連付けをした上で設置している大学は少ないようである。

3. 大学における文章作成技法授業の実践

3.1 情報探索入門(京都大学)の新設

1998年4月から始まった京都大学における「情報探索入門」は、東京大学教養学部の「知の技法」シリーズに集約された基礎演習に対する挑戦とも考えられる画期的な内容の科目である。これは京都大学の全学共通科目とされており、1999年3月にその講義録が『大学生と「情報の活用」: 情報探索入門』³⁾として発行された。そこに掲載されている授業日程の概要は下記のとおりで、1998年度は前期に13回の講義と演習が行われ、演習には補助者として図書館を中心とする職員が支援、担当していることがわかる。

授業日程 (京都大学全学共通科目)

すべての授業は月曜5限(午後4時30分から6時)に行った。

- 1回: 4月13日 大学図書館への招待(講義)
- 2回: 4月20日 分類の一般概念と分類理論(講義)
- 3回: 4月27日 同上(演習)
- 4回: 5月11日 文献や情報の広がり(講義)
- 5回: 5月18日 文献と情報の存在を突きとめる(講義)
- 6回: 5月25日 同上(演習)
- 7回: 6月1日 データベースの種類とその利用法(講義)
- 8回: 6月8日 同上(演習)
- 9回: 6月15日 インターネット情報と利用法(講義)
- 10回: 6月22日 同上(演習)
- 11回: 6月29日 参考資料の種々とその利用法(講義)
- 12回: 7月6日 同上(演習)
- 13回: 7月13日 情報探索とその周辺(講義)

これらの授業の担当者一覧(下記)を見ると、京都大学が全学を挙げて取り組んでいるのがよくわかる。特に注目すべきは、総長が第1回を担当し、演習はすべて附属図書館の職員が担当してい

ることである。

「情報探索入門」担当者一覧（一部省略）

[講義]

長尾 真（総長），菊池光造（附属図書館長），川崎良孝（教育学研究科教授），金子周司（薬学研究科助教授），黒橋禎夫（情報学研究科講師）

[総括・調整]

高橋 柏（附属図書館事務部長），慈道佐代子（附属図書館情報サービス課参考調査掛）

[演習補助者等支援職員]

小川晋平（附属図書館情報管理課電子情報掛）ほか17名。

言語表現法でも情報探索に係わる内容が講義されていることは報告されているが、図書館を中心とする職員の補助や支援、実習担当などが報告に現れてくることはほとんどなかった。京都大学の講義録にはそれがはっきりと記述されている点が、特に画期的である。従来は支援を得ていても、それが表面に出てこなかったため、その役割が明確でなかったのである。

3.2 大学における授業の実践から生まれた図書

前述の『大学生と「情報の活用」』（京都大学の「情報探索入門」講義録）と同様に、大学における授業の実践から生まれた図書が、次々に出版されている。次にそのうちの4点の概要（目次）を紹介する。

(1) 『だれも教えなかった論文・レポートの書き方』⁴⁾（流通科学大学）

第1章 なぜレポートを書くのか

第2章 書く前の準備：アイデア発想

第3章 文献の検索と文献レビュー

第4章 データ収集・分析・プレゼンテーション

第5章 書くプロセス

第6章 最終仕上げとレポートの見かけ

第7章 レポートのまとめ方

付録1：文献の紹介

付録2：実例論文

(2) 『言語表現法講義』⁵⁾（明治学院大学）

第1回 頭と手 この授業について

第2回 課題とタイトル

第3回 他者と大河 推敲・書き出し・終わり

第4回 文と文の間 文間文法・スキマ・動き

第5回 糸屑と再結晶 ヨソから来るもの

第6回 言葉はどこで考えることと出会うか

第7回 いまどきの文章

第8回 遅れの問題

第9回 フィクションの自由

最後に 方法の話

基本文献案内

(3) 『大学生のための研究の進め方・まとめ方』⁶⁾（ノートルダム清心女子大学）

第1章 研究の開始とその展開

第2章 文献資料の収集

第3章 社会調査

第4章 統計資料の読み方

第5章 資料の整理

第6章 レポート・論文

第7章 文章と文章構成

第8章 原稿の書き方

第9章 口頭発表

(4) 『経済論文の作法：勉強の仕方・レポートの書き方』⁷⁾（静岡県立大学）

序章 勉強は楽しい！

第1章 論文のテーマ探し

第2章 では執筆にとりかろう！

第3章 既存研究の見つけ方

第4章 実証分析とデータ・情報の集め方

第5章 論文の書き方

第6章 発表の仕方

第7章 エンジョイ！ 経済学

第8章 電子情報・インターネット情報と経済分析

3.3 富山大学における実践記録

(1) 『げんごひょうげん』（富山大学言語表現部会報告書⁸⁾による実践報告

1993年度から富山大学が開始した「言語表現科目」の報告書が、担当者（外部講師を含む）による報告文と実践記録を収録して、毎年刊行されて

いる。論文執筆法担当者にとっては大変参考になり、また励みにもなる内容である。また、他大学における状況も報告されていて、関係者にとっては日本の大学全体の動向を知るための貴重な文献の一つである。

(2) 富山大学における科目新設の経緯

筒井洋一教授の報告では、新設の経緯を次のとおり述べている。

「近年、学生の自己表現能力の低下が顕著であり、かれらの多くは大学教育において最低限必要なコミュニケーション能力を欠いている。1993年4月に富山大学において「言語表現科目」が新設された。これはそうした学生の基礎的な表現能力の欠如を補いつつ、文章や言葉を通じたコミュニケーション能力の向上をはかることを目的としている。」⁹⁾

そして、新設のきっかけを次のように述べている。

「当大学では中堅・若手教官を中心とする下からの要求を受けとめ当科目の新設に踏み切った。こうした科目が全学的に実施され、全学部(人文・経済・教育・理・工五学部)から担当教員が参加しているのは当大学が唯一である。」⁹⁾

このような下からの要求に応える形で開始したことも要因の一つであろうが、現在ではさらに充実し、発足当初は13、4名の担当教員であったものが、1998年には30名ほどになったということである。1クラスの学生は平均で20名位であるという報告¹⁰⁾もあり、理想的な人数であろう。

(3) 授業担当にあたっての最低条件¹¹⁾

- ① シラバスを必ず出す。
- ② 専門家を招いて教授法の研修会を開催し、これにはできるだけ参加する。
- ③ 科目独自の授業評価アンケートを最終回の授業で実施する。

(4) 授業内容事例(講義要綱)²⁾

- ① 講義の目的(i. 研究レポートの書き方。ii. 口頭発表の仕方。iii. ツールとしてのコンピュータ作業(インターネットを含む))
- ② 日時: 毎週木曜日4限。

③ 教室: CL教室

④ 学生定員: 20名以内

⑤ テキスト: 『表現技術 1~3』創拓社, 1995

⑥ 最終評価: レポートの提出(2回)と出席点(出席は励行させる)

⑦ 授業開講日と講義内容

- | | | |
|------|-------|---|
| 第1回 | 4月13日 | オリエンテーション, クラス確定, スピーチ実習, クラスの仲間と知り合いになる。 |
| 第2回 | 4月20日 | リサーチ技法実習1: 図書館での文献検索 |
| 第3回 | 4月27日 | リサーチ技法実習2: コンピュータ入門, 文章実習 |
| 第4回 | 5月4日 | 祝日 |
| 第5回 | 5月11日 | わかりにくい文。電子メールの使い方 |
| 第6回 | 5月18日 | レポートの書き方。文章実習 |
| 第7回 | 5月25日 | 相手に説明する。スピーチ実習。第1回レポート課題提出 |
| 第8回 | 6月1日 | 意見を書く・読む。文章実習 |
| 第9回 | 6月8日 | 相手を説得する。第1回レポート提出。相互添削 |
| 第10回 | 6月15日 | 米大統領に電子メールを送りたい。第2回レポート課題提出 |
| 第11回 | 6月22日 | レポートを完成する。文章実習 |
| 第12回 | 6月29日 | インターネットで世界をサーフィンする。スピーチ実習 |
| 第13回 | 7月6日 | 第2回レポート提出。学生相互で添削する。文章実習 |
| 第14回 | 7月13日 | レポートに対するアドバイス |
| 第15回 | 7月20日 | 意見交換。学生による授業評価 |

(4) 富山大学の最新情報

富山大学では、前述したように、毎年、授業実践報告書を刊行しているが、その後の最新情報、特に新入生向けパンフレット、シラバス、オンライン教材、テスト問題・結果、成績、課題作品な

どを、富山大学の「言語表現」ホームページで読むことができる。

(URL <http://hyogen.edu.toyama-u.ac.jp/>)¹³⁾

3.4 論文・レポートの書き方：市販の出版物を探る

論文やレポートの書き方をテーマとした出版物は多数ある。昔は「文章読本」という名の作家や文豪による名著執筆法の出版物が多かったが、その後、主流はビジネス文書あるいは技術文書に移行し、さらに、テクニカルライティングという名の技術マニュアル本の書き方が多くなった。カタログや広告文を対象とする「コピーライター」という言葉が流行ったこともある。そして現在は、大学生相手の「卒論の書き方」、あるいは一般的な「論文の書き方」が主流になりつつある。ここでは、そのうちから主として大学生を対象とする、論文執筆法入門あるいはテキストを中心に、それぞれの本の目次から、その内容を探っていく。

(1) 『入門・論文の書き方』¹⁴⁾鷺田小弥太著（PHP新書）1999年5月

序章 論文は名刺代わり

第1章 論文のテーマはどう決めるか

第2章 書き始めるまでの準備

第3章 実際に論文を書いてみる

第4章 論文に不可欠な付録（参考文献と引証資料、注、索引、献辞）

第5章 書いた論文を発表する（研究誌、ジャーナル誌、著書、同人誌、個人誌）

第6章 論文のアフター・ケア（後から集まってくる関連必要資料、書き残したテーマをどうするか、書いたものの意外な成長と展開、自分の著作目録をつくる、著作をデータベース化する）

あとがき（本書の主張点：第一に、情報化社会の進展の中で、誰もが「論文」を書く時代になった。第二に、論文を書くためには、もちろん、小論文や報告文とは違った技術が必要になる。第三に、短文が自在に書ければ、どんな長文でも書くこと

ができる技術がある。）

(2) 『レポート・論文の書き方入門』¹⁵⁾河野哲也著，慶應義塾大学出版会，1997年8月

一章 大学での勉強とレポート・論文の書き方はじめてレポートを書く人のために

1.1 本書の目的と特徴

1.2 大学の教育とレポート・論文の書き方

1.3 レポート・論文の有用性

1.4 本書の構成

二章 テキスト批判という練習法

2.1 テキスト批判とは何か？

2.2 なぜ本（テキスト）を読むのか？

2.3 テキスト批判の仕方

2.4 テキスト批判の効果

三章 論文の要件と構成

3.1 論文とは何か？

3.2 レポートとは何か？

3.3 レポートを書く際の注意

3.4 論文の構成部分とその順序

3.5 各部分で何を書くか？

3.6 その他の構成方法

四章 テーマ・問題の設定，本文の組み立て方

4.1 テーマ・問題の設定

4.2 本文の組み立て方

五章 注，引用，文献表のつけ方

5.1 注のつけ方

5.2 「注記号」と「注欄」のつけ方

5.3 引用の仕方

5.4 注欄における引用出典の書き方

5.5 文献表の作り方

5.6 欧文略号・略記一覧

付録：接続語・接続表現による文の論理的結合

参考文献

あとがき

(3) 『卒論・ゼミ論の書き方：新版』¹⁶⁾早稲田大学出版部編刊，1997年5月

卒論・ゼミ論あれこれ

テーマをつかもう

指導教授をえらぼう

悪いテーマとよいテーマ

準備にとりかかる

資料の整理は

フィールド・ワークの場合

さあ執筆だ

序論から結論へ

補正から浄書へ

XI 製本から提出まで

XII 口頭試問の前後

資料：卒論規定の例，卒論題目例

あとがき

(1)の図書は、ビジネス用であるが、大学生の副読本として十分に役立つ内容である。最新の出版物であるという点で取り上げた。しかし、参考文献などを「付録」と位置付けているのは時代遅れの考え方であろう。これらは論文の一部として考えなければならない。索引ならびに自分の著作のデータベース化を取り上げているのは新しい観点である。

(2)の図書は、大学生向けのテキストであるが、比較的新しい出版物である。テキスト批判という新しい手法で論文の書き方を取り上げている。基本的な要件と形式を重点的にまとめた、簡潔な内容の教科書である。索引に関してもふれており、最新動向を取り入れている。

(3)は、3冊の中では最も歴史のある教科書であったが、1997年に全面改訂されて、新版が発行され、内容が一新した。縦書きで統一していた様式も、横書きとなり、他の図書と変わらないほどに新しい内容になったが、昔の面影がどこかに残っており、構成項目、書式などにも伝統を感じる。索引については、必要な場合に付けるとしている。巻末に資料集があり、インターネットのホームページアドレス一覧も載っている。しかし、インターネットのアドレスは頻繁に変更される場合もあるので、一覧表に調査、あるいはアクセスした日付(年月日)を記入しておくべきであろう。

4. 論文執筆法の概要

4.1 科目の位置づけ

駿河台大学文化情報学部における「論文執筆法」のカリキュラム全体における位置付けについては、前稿¹⁷⁾で述べたので詳細は繰り返さないが、共通基礎科目群に属し、「資料検索法」「論文執筆法」「研究調査法」ならびに「プレゼンテーション法」「プレゼミナール」という5科目から構成されているオリエンテーション科目のうちの中心的な科目であることを強調しておきたい。

すなわち、「論文執筆法」はこれらオリエンテーション科目の導入部あるいは学習の目的であり、最終目標の一つでもある。そこで、大学における学習の始まりと終わりに位置すると考えることも出来る。すなわち、論文を書くために必要な情報や資料・文献を探し、集める(資料検索法)のであり、専門的な分野の研究や調査方法を学び(研究調査法)、これらを使って集めた内容を最終的には論文としてまとめ、完成させる(論文執筆法)のである。

4.2 学生の選んだ論文テーマ・題目

1997年度春学期に、1年次学生が選んだ論文(小論文あるいはエッセイに近い長さの文章)のテーマ・題名はつぎの通りであった。

- (1) 心理学入門
- (2) 野球の自分流の見方
- (3) オゾン層破壊 オゾン層の今とこれから
- (4) 大学教授なら賢いのか
- (5) ブルートレインの歴史
- (6) 美と伝説 三つの国が生んだ美女達
- (7) アインシュタインはなぜ天才なのか
- (8) 楽園への回帰願望と思想：宗教における精神世界の位置付けと人類のEDENへの憧れ
- (9) たばこの正体
- (10) 独裁者アドルフ・ヒトラー：知られざる過去
- (11) 夫婦別姓 賛成・反対論議に決着をつける新たな意見
- (12) 夢 人はなぜ夢を見るのか？

- (13) ヒトラーについて：彼が愛した戦争とドイツ
 - (14) いじめの解決法を考える
 - (15) 伊達政宗 政宗の生き方と福島との関わり
 - (16) 人と猫：その間のきずな 猫が与える影響
 - (17) 地震国日本 地震の基礎を知る
 - (18) 人はなぜ音楽を愛するのか 音楽の効用からみた人間関係
 - (19) パイオエシックス 生命倫理の現状把握とこれから
 - (20) 現代の教育は教育ではない 本当の教育とは
 - (21) 自転車のすべて これからは自転車時代
 - (22) アイルランドの宗教 宗教によって左右されるアイルランドの歴史
 - (23) 馬と競馬の歴史
 - (24) 大学の必要性について：大学生生活の意味を考える
 - (25) いじめ問題とその対策
 - (26) オリンピックに隠された光と影
 - (27) 原子力発電について
 - (28) ムーミン物語について：なぜムーミン物語が誕生したのか
 - (29) 缶コーヒー：コーヒー缶の珈琲館
 - (30) 演劇について：演劇入門
 - (31) ひとつの文化として見るサッカー・Jリーグ：サポーターの目で考える
 - (32) 最新CPU：Pentium とは何か
 - (33) マルチメディアと著作権：パソコンソフトと著作権法について
 - (34) 沖縄の言語、沖縄の方言：琉球方言の今までとこれから
 - (35) FIグランプリの未来は？ 世界最高峰の自動車レースであるために
- 4.3 「論文執筆法」の講義内容**
- 筆者による1997年度「論文執筆法」の講義内容（要綱）は次のとおりである。
- （第1週）文章を書くことの意義と論文執筆法のねらい
- (1) 文章の意義
 - (1.1) なぜ文章を書くのか
 - (1.2) 情報表現のための手段としての文章
 - (1.3) 論文の文章スタイルとその必要性
 - (2) 論文執筆法の位置づけ
 - (2.1) オリエンテーション科目の始まりと終わりに位置する
 - (2.2) 学習の始まりに文章がある
 - (2.3) 目標として文章執筆がある
 - (2.4) まとめとして論文執筆がある
 - (3) 文学的作品（随筆，詩，小説など）と論文・レポートとの違い
 - (3.1) 客観的な記録表現と主観的表現との相違
 - (3.2) 日本文の特色（英文との比較）
 - (3.3) 文学作品と論文の相違
 - (4) レポート・論文の特徴と事例
 - (4.1) 論文（学術文書）と一般文書（実用文書，ビジネス文書）との違い
 - (4.2) 初歩的なレポート・小論文の作成
 - (4.3) メモ，ノートからレポート，論文まで
 - (4.4) レポートの事例（学習用，研究用，業務用）
 - (第3週) レポート・論文の形式
 - (5) レポート・論文の形式と種類
 - (5.1) メモ，ノート，ファイルの事例と形式
 - (5.1.1) メモの取り方
 - (5.1.2) ノートの取り方と整理法(ファイル)
 - (5.2) 収集資料リストの作り方
 - (5.3) 準備資料のまとめと整理，保管（ノート，メモ，資料，コピーなど）
 - (5.4) レポートの基本形式
 - (5.5) 本格的な論文
 - (第4週) 実用文の執筆
 - (6) 知的生産のプロセスとしての原稿作成
 - (7) 実用文の典型を学ぶ（例文配布）
 - (8) 実用文の作成（演習）
 - (第5週) 案内文の作成ならびに参考文献リストの作成法
 - (9) 案内文の典型を学ぶ
 - (10) 案内文の作成（演習）
 - (11) 参考文献リストの作成法

- (第6週)小論文作成の実際
- (12) 論文の表題事例研究
- (13) 論文作成のポイント
- (13.1) 論文のテーマ
- (13.2) 論点, 問題点の提起
- (13.3) 仮説 自分の創意
- (13.4) 論じる, 論証する
- (13.5) 結論
- (第7週) 論文の形式
- (14) 論文形式の基本
- (14.1) 論文の題名
- (14.2) 執筆者名
- (14.3) 目次
- (14.4) 本文(序論, 本論, 結論)
- (14.5) 注(引用, 参考文献の注を含む)
- (14.6) 付録
- (14.7) 文献一覧(引用, 参照, 参考文献)
- (14.8) 索引
- (第8週) 司馬遼太郎を読む
- (15.1) 『日本人のスピーチ』を読む
- (15.2) 読んだ後で, 「話しことばと書きことば」について考える
- (15.3) 「話しことばと書きことば」についてエッセイ(短文)を書かせる
- (第9週) エッセイ(短文)の書き方を考える
- (16.1) 先週のエッセイを事例として考察する
- (16.2) 縦書きと横書きの書き方
- (16.3) 原稿用紙の使い方
- (第10週) 目次・索引の作り方
- (17.1) 論文と目次と索引
- (17.2) 目次・索引の作り方
- (17.3) 目次の題名事例考察
- (17.4) 索引作成事例検討
- (第11週) 小論文の完成
- (18.1) 論文表題の確認
- (18.2) 論文目次と項目名の確認
- (18.3) 文献リストの確認
- (第12週) 論文の提出と期末試験

5. 受講後の感想

受講後に受講アンケートを行っているが、その際に寄せられた学生の感想の中から主なものを次に紹介する。

- ① この授業を受けて、少しだけ小論文を書くことが好きになり、うまくなったような気がします。
- ② 論文を書くことは初めてだったので、何から手をつければいいのかわからない。
- ③ 自分で研究・調査した上で論文を書くことは、今までにほとんどなかったので、一年生の初めにいろいろ勉強できてよかった。
- ④ 今までは、まとまった分量の文章を書くことがほとんどなかったのですが、こうして論文を書かなければならないというのはかなり大変だった。
- ⑤ 小論文を書くのが初めてです。そんな私にとって、2週間前後で書き上げるというのは酷です。
- ⑥ 今まで論文というものを何度か書いてきたが、これほど深いものとは思わなかった。非常に難しいものだ。どのように表現するのかが問題である。
- ⑦ きちんと手順をふんでゆけば、論文を書くことが容易になるということに気づかされた。
- ⑧ 一万字近くの長文は、今までに書いたことがなくて、苦労しました。資料も山のようにあってどれを参考にするのか考えるだけで時間が過ぎてしまいました。
- ⑨ 論文執筆を始めとして、時間のかかる課題が多く、苦労しましたが、それだけ自分のものになったかなと思います。この授業を受けて、自分は大学生なんだという気持ちになりました。
- ⑩ 文章を書くことが大変苦手なので、かなり辛い授業でした。
- ⑪ 論文の書き方をちゃんと学べて良かった。今後大いに役立つと思います。何か書くことはおもしろいとも感じました。
- ⑫ 論文の書き方は細かいことが多くて難しい。
- ⑬ 論文を書くということは、いろいろなことに

気をつけなければならないので、難しいと思った。

- ⑭ 論文の書き方の説明が多く、つまらなかった。もっと実際に体験できる授業を望む。例えば授業内で、千字程度の論文を参考文献を集めながら作成し、その後、詳しく論文の書き方を説明してから、長めの論文を書くように指導したらよいと思う。
- ⑮ 課題の論文の量が多すぎる。

6．おわりに

6.1 学生の感想について

論文執筆法を担当して思うことは、ふだんは文章を書かない学生が多いということである。入試に記述式の問題が少なくなったり、あるいは全く無くなったりしたことも、文章を書く機会が減少する傾向に拍車をかけているのかも知れない。

高校までに文章を書かなくても済むような教育を受け続けてきた学生には、いきなり文章を書け、しかも論文を書けといわれても無理であろう。しかし、実社会では、電子化の進展と共に、電話だけで仕事ができたとバブルの時代から、電子的な技術と装置を使って、電子記録や文章（連絡文を含む業務用文書）を活用した通信ネットワーク中心の時代に、転換しつつある。話し言葉から書き言葉（記録文書）が中心になったという意味では、昔に逆戻りしたとも考えられるが、これがビジネスの世界標準なのであり、本当の仕事の進め方なのだと思う。

また、何人かの学生が書いているが、文章作成の実習を授業内演習のような形でとり入れることが必要である。授業内演習の実施は何度か試みてはいるが、その方法や内容、さらに個別指導の困難性など、いくつかの課題があり、成果は上がっていない。一つのクラスにおける学生定員の決め方などとともに、今後の大きな課題である。

学生には、紙に書いた（ほとんどはワープロソフトを使用し、パソコンからプリントアウトしたものであるが）文章を提出させたほか、短い連絡

文章や、テーマの項目、執筆論文の日程計画などは、電子メールを使って提出させた。最初は情報処理実習の授業のペースと歩調が合わず、電子メールの使えない学生もいて苦労したが、学期の終わり頃にはほとんど全員が電子メールで課題の提出ができるようになり、コンピュータリテラシーの習得にも役立ったと考える。

6.2 これからの進め方

「論文執筆法」という科目名の問題もあるが、ここでは取り上げない。本稿では、オリエンテーション科目の中での文章作成技法の取り扱いを中心に考えたい。

紹介した事例をもとに考えると、二つの方向があらう。ひとつは、中心科目のもとに統合するという方法である。これは富山大学の例でも、あるいは京都大学の例でも同様であるが、論文を中心に位置付けるか、情報探索というプロセスの最終段階として位置付けるかという相違だけで、中心科目のもとに統合するという方法にかわりはない。

もうひとつは、駿河台大学でおこなっている方法で、新入学生対象のオリエンテーション科目群のひとつとして位置付けるというものである。これは従来の教養科目とは違う考え方の科目であるから、全体構成と科目の設定を十分に検討する必要がある。

「情報リテラシー」という新しい考え方に近いのが、オリエンテーション科目群である。情報リテラシーに関しては、前稿¹⁸⁾の「資料検索法」紹介の中で行ったので、繰り返さないが、主として米国における図書館利用教育の長い経験の中から生まれたもので、日本の大学図書館でも次第に定着しつつあると考える。

京都大学の実践は、内容からみると、情報リテラシー教育であるが、初めての試みでもあり、そこまでの言及は見当たらない。しかし、実践を重ねてゆくと、結果として、情報リテラシー教育になっていくのであらう。その意味では、これが将来の方向を示しているのかもしれない。

他大学の事例とともに教科書、出版物などの文

献による検討も加えて、今後の方向を探る努力を重ねてゆきたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 戸田光昭．情報活用能力を高めるための基盤としての、大学における情報リテラシー教育(その2) オリエンテーション科目としての「資料検索法」 文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要。Vol. 5, 2, p. 37-42 (1998. 12)
- 2) 猪瀬直樹．活字で心を洗う．朝日新聞 1999. 5. 30 朝刊, p. 19
- 3) 長尾 真監修, 川崎良孝編．大学生と「情報の活用」：情報探索入門．日本図書館協会(発売), 1999
- 4) 阪田せい子, ロイ・ラーク著．だれも教えなかった論文・レポートの書き方．総合法令出版, 1998
- 5) 加藤典洋．言語表現法講義．岩波書店, 1996
- 6) 田代菊雄編著．大学生のための研究の進め方・まとめ方(新版)．大学教育出版, 1994
- 7) 小浜裕久, 木村福成著．経済論文の作法：勉強の仕方・レポートの書き方(増補版)．日本評論社, 1998
- 8) 『げんごひょうげん』は、富山大学言語表現部会が毎年、年度末にまとめている報告書．1 (1993年度報告書) が1994年3月に発行されて以来、毎年発行されており、1999年3月発行の 6 (1998年度報告書) が最新版である．
- 9) 筒井洋一．富山大学における「言語表現科目」の新設とその意義．げんごひょうげん． 3, p. 1-8 (1996. 3)
- 10) 筒井洋一．大学における表現教育の全国的傾向とその意義 富山大学の「言語表現科目」の実践を通して げんごひょうげん． 6, p. 12-13 (1999. 3)
- 11) 筒井洋一．前掲文献(1999. 3)．p. 13
- 12) 筒井洋一．前掲文献(1996. 3)．p. 7
- 13) げんごひょうげん． 6, p. ii (1999. 3)
- 14) 鷺田小弥太．入門・論文の書き方(PHP新書)．PHP研究所, 1999
- 15) 河野哲也．レポート・論文の書き方入門．慶應義塾大学出版会, 1997
- 16) 卒論・ゼミ論の書き方：新版．早稲田大学出版部編刊, 1997
- 17) 戸田光昭．前掲文献．p. 40-41
- 18) 戸田光昭．前掲文献．p. 38

Information literacy instruction in university education: Infrastructure for improving the ability for practical use of information (3) "Methods of writing papers" in the orientation course.

By Mitsuaki TODA

[Abstracts] How to write papers is the first exercise of university education and the basic ability to graduate. I present several cases at university curriculums, especially at Surugadai University, and discuss how to set up the best way to study the basic ability.

[Keywords] information literacy, university education, library skills, writing papers, writing an essay, reading and writing skill.